

## 続「城下町の憂鬱」紅いランプシェード

「グースの家」。店先にガラス細工のスタンドグラスが並ぶその小さな店には、列車をかたどった小さな表札が掲げられている。

あれは大学を出て間もない頃。空が茜色に染まり家路を急ぐ勤め人が足早に駅に向かう刻。朝からコーヒー一杯を片手に、眉毛も書かず T シャツに短パンの出で立ちで続けていたペイントの手を止めると、私は決まって一人暮らしのマンションの窓を全開に開け、富士の方角に沈みゆく太陽を拝みオレンジから紫、藍へと沈みゆく西の空に向かって目いっぱい大きな息を吸ってから、そそくさとメイクを済ませてアルバイトに出かけたものだった。マンションの下に停めてある自転車を駆り、児童公園の脇を過ぎてクランク状の急な坂を駆け上がるとそこは丘の上に塀や生垣の並ぶ邸宅街。ふと来た道を振り返ると、まだほんのり青みが残る空を背景に、スタイルの良いメタセコイアの木々が尖った穂先を天に向け、切り絵のような鋭利なシルエットを見せていた。別所沼の木々を背に進むと間もなく国道沿いのビル街に出る。私は県警の裏を通過して裏門通り沿いに古物商などの並ぶ可愛い商店街をゆっくりと走り抜け、駅前の繁華街を通り抜けた南側の丘にあるアルバイト先のサンドイッチ店へと向かった。

大学のゼミで出会った彼と別れることになって早 1 年と半年が経とうとしていた。彼が長州萩の出身と知って猛反対する会津の両親、それでもきっと一緒に幸せになると夢を語ってくれた彼、そしてもう何が何だか分からなくなって自ら距離を取ってしまった私…。今から思えば最後に一番ぶれてしまったのは私自身かもしれないし、彼をも傷つけてしまった。しかし、結婚というものの重さを目の前に突き付けられ頭がいっぱいになっていたあの数か月を振り返るに、それまでの全てを清算して一人地縁もないこの街に引っ越してきたことは、悲嘆の中にも一つの清涼剂的な役割を果たしていたのを自分でも認めざるを得なかった。とはいえ、今の私はどこかに属しているということでもない。誰と繋がっているということもない。就職も決まらぬまま大学を卒業し、まずは自分の可能性を試すためかつてアトリエ村と呼ばれたこの街の一角、別所沼の木々が見下ろす静かな家で絵を描き続けよう…なんて思っていたわけであるが、しかしその絵描き見習い？生活も早 1 年、そんな若者らしい幻想にも少々限界を感じつつ、次の人生に踏み出すこともできず結局はいくつかのアルバイトをつなぎながらその日の生活を凌いでいるのだった。

私の働く店でいつも必ずオレンジサンドとコロケサンドを買っていく男の人がいた。歳の頃は自分より少し上、30 前後だろうか。私より頭一つも高い背に、お気に入りらしいグレーのジャケットが良く似合う。毎週月曜から木曜までの毎日、必ず店先に並ぶ卵サンドやツナサンドなんかを一通り楽しそうに眺めてから、それでいて最後はおもむろに端にあるオレンジサンドとコロケサンドを一つずつ手に取って素っ気無く「こちらを…」と差し出して来る。そのサンドと千円札を差し出して来る指先が男の人とは言えほっそりと長く、なぜか私を不安にさせるのだった。あのサンドイッチは誰かと食べるのだろうか？それとも一人で？

いつも仕事が終わると私は売れ残りのサンドの中からお気に入りのツナサンドを一つ貰って帰りに浦和の駅の南の遊歩道に出向いた。奥武線の線路の上に作られた人工路盤には緩いカーブを描く散歩道が作られ、初夏にはタチアオイの花が彩り、秋には歩道を包み込むようにコスモスが咲き乱れた。その遊歩道の突端、金網で仕切られた柵のあるところまでやって来ると足元で地下から飛び出して来た奥武線の複々線が、反対に高架から下って来る JR の三複線と合流して南へ向かうのが見える。遠く前灯の灯りが現れるとぐいぐいと近づいてきて地下の浦和駅へ吸い込まれる奥武線の列車は 6 両編成から 12 両編成まで色々だが、そのどれもがキラキラと窓を輝かせ、あああの一つ一つに仕事から家に帰る人たちの生活があるのかな、家では家族が待っているのかな…そんな妄想を掻き立てて止まない。実家のある会津方面に向かう最終の特急は 21 時 12 分浦和着。そんなものを見たらちょっとは陰鬱な気分

にもなったかもしれないが、幸い仕事が終わるのはいつも 21 時半を優に過ぎていたので、私の目に映るのは通勤電車や急行電車に、あとは熊谷や宇都宮に向かう深夜の中距離ライナーばかり。ライナーの座席に深々とかけて窓辺を見る勤め人の姿を見ていると、北関東の家で待つ家族に会いに毎日帰る彼らが燕の親鳥のようでもあり、またそんな生活がとてつもなく健全で人間的にも思えてくるのだった。

蝉時雨もピークを過ぎ、冷房を節約するため開け放した窓の外、我が世を謳歌する主役もアブラゼミからヒグラシへと代わって来たその日。朝から私は製作途中の抽象画の手を置き、スケッチブックを取り出してジャケットに身を固めた男と、その手に添えられたサンドイッチのデッサンをしていた。彼は今日もサンドイッチを買いに来るだろうか？ 買い物以外の、何か他のことで話しかけてくれることはないだろうか…。マンションの下で自転車に跨り公園内をゆっくりと通り抜けようとする、高く抜ける空には翳のような秋の雲が 5 本の指でそっと触れ柔らかかに筋を引いたような斑紋を見せ、その下に夏の名残の綿あめのような雲が千切れ千切れに吹き飛んでいる。ああ、また季節が流れていく…。浦和の駅前ではデパートのビアガーデンののぼりもなくなり、代わりに全国駅弁展の広告が。もう少しすれば街中に金木犀の香りも漂い出すのだろう。そんな秋の装いに包まれるこの街を想像しながら重いママチャリをこぎ進めていくと、バイト先の店先にいつもの彼が立っているのが見えた。おや？いつもと違い今日はスーツ姿だ。店に入る刹那思い切って声をかけてみる。「今晚は、今日も有難うございます…。」どこか喉の奥がつかえたような私の声に彼がぐるりと振り返ると、その陰から艶やかな黒髪にふわりと広がるロングスカートの女性が現れた。いつもはあまり表情を見せない彼が、いつになくほころんだ笑顔で応える。「今晚は、こちらのお店のコロツケサンド、僕大好きなんですけれど、実はやっと就職が決まって来年から都内に移ることになって…。」隣りの女性も柔らかな笑みで続けた。「私も毎日オレンジサンドをせがんで頂戴していたので、ここを離れるのは寂しいのですが…また時々こちらに用のある時には伺いますね！」え？もしかして大学生？？しかも彼女持ち！！？

いやはや、その日の仕事はもう散々だった。注文を間違えるは、お店を閉じた後の会計の締めも 2、3 回やり直すは…。年長の店員さんが「今日はどうした？明日もあるし、早く帰りなさいよ」と言ってくれたので少し早めに出してもらい、自転車に乗る気も起きずに押してこぎ、気付くと私は奥武線の見える金網の前に立っていた。ああなんて無様なのだろう。私はいつもこんなだ。朝から浮ついた絵を描いて夢想していた自分が恥ずかしくなった。彼は仕事も得て、恐らくは遠くない将来に家庭を得て…そして目の前に行き交う電車に乗っている多くの人のように、帰る家を持つのだろう。6 畳一間のマンションで作品、というも憚られる、思いの丈をぶつけて塗りたいだけの代物を量産している自分はこれで良いのだろうか？と、その時、遠くからいつも見ている電車たちとはちょっと雰囲気の違いが近づいて来るではないか。暗くて良く分からないが地響きのような轟音を打ち鳴らすディーゼル機関車に牽かれ、何やら長く続く客車列車がゆっくりと近づいて来る。客車の天面は丸いドーム状で大きく膨れ上がり、側面にはあかね色と肌色のツートンに不規則に打ち抜かれた丸や四角の窓。内部にはダイニングテーブルだろうか、紅いスタンドグラスの灯火がちらちらと見え、そこに映る人影が細かく動いている。居室だけではない。レストランやバー、カフェなど色とりどりに輝く大きな窓が、これから静まろうとする夜の街並みを照らしつつ走馬灯のように流れていく。とてつもなく遠くへ行きそうな、それでいて居心地の良さそうな列車。寒色系の車両が多い奥武線にあってあかね色と肌色の車体もどこか懐かしい。一体あれは何という列車だろう…。あのオレンジの灯と紅のランプシェードが灯る寝台客室に居る人たちはどこへ向かうのだろう。

目の前を行き過ぎる長い蛇のような寝台列車を見送ると、私ははっと我に返って自転車に跨り、繁華街を抜けて県庁の表側を横切る大通りを廻り、国道を越えて中心街から離れると暗がり避けるように太い道を選んでマンションを目指した。自室の電気を灯すと、ああ我が蛍光灯の灯のなんと味気ないこと。そして目の前に横たわっている描きかけの「彼」の絵の、何と恥ずかしいこと。それに比してさっき目の前を横切って行ったあの列車の車内の、何と暖かで、心惹かれること…！

次の日奥武鉄道のホームページを調べると、かの列車は寝台特急過雁。秋田へ行く列車らしい。いつもならもっと遅くまで仕事しているのでそんなものが走っていること自体気づかなかったが、浦和駅には21時41分にやって来ているのか。1泊4万円を越える一人用スイート客室はさすがに予算オーバーだが、メゾネットや、ちょっと奮発してクラシックなら何とか手が届くかもしれない。特にクラシックなら事前予約で食堂車での食事もできるらしいから、冬にでもあの列車で秋田に行ってみようかしら…。

人の人生の転機なんてどこに転がっているものか分かったものではない。それから毎日私は少し早く仕事を切り上げて北へ向けて下って行く過雁を眺めるのが日課になってしまった。雨の日も、風の日も、過雁はただただ私の憧れを乗せて、夜の町を優雅に去って行った。台風の吹き荒れた日には運休になるのではないかと危惧したが、それでも定刻で北上していく過雁に、そしてその車内を灯す紅いステンドグラスのランプシェードに、いつしか私は自らの夢を託していたのかもしれない。

秋が過ぎ、関東では空っ風の吹きすさぶ冬、私はついに過雁に乗った。普段通勤電車がせわしなく行き交う浦和の地下駅に、深みのある紅が美しい12両編成の客車が入って来る。いつも地上の遊歩道から眺めていた憧れの列車が今目の前に滑り込む。片開きのプラグドアには曲面ガラスを使った丸窓がしつらえられ、デッキの上の排気孔からは暖房の暖かな空気がゆらゆらと立ち上っている。建築限界ぎりぎりまでせりあがった天井も広く、この特別な列車は北へ向かう人々を暖かに迎え入れてくれるのだ。

初めて乗るクラシックの客室はブドウ色の絨毯。レストランでの食事を終え、夜の奥武本線を北上する客車列車は私を深い眠りへと包み込んだ。翌朝、終着の秋田からはJR五能線の列車に乗り継ぎ、初めて津軽の地へ。冬の日本海は雪こそそこまで積もるといほどではないものの海から吹き付ける風に列車は最徐行。蒼黒い空に、風に煽られつつも鳴き続けるウミネコの姿がいじらしい。途中深浦の小さな宿に3泊ほど泊まった。強い津軽訛りの主人がここはかつて太宰も泊まった町だと自慢してくれたが、小さな漁師町には構えの大きな古い宿屋も残り、かつては北前船の船着き場として栄えたのだろう、しかし今ではその華やかなりし頃の空気がそのまま北風で固まり、氷塊となってただただ吹き付ける蒼い風に対峙しているようであった。壮絶な津軽の冬景色は、しかし私の心になお一層、暖かいものを作りたいという欲求を掻き立てた。深浦、金木と津軽の地を廻って帰りの過雁は結局思い切り贅沢をしてシングルスイートに。行きのクラシックで利用したレストランオワジュノールも興奮の連続だったが、シングルスイートの専用客室に灯るダイニングテーブルの紅い灯の不思議な力。日本海に浮かぶ漁火を眺めながら、あああそこで冷たい海の中漁に命を懸けている人生もあるのだと、日本海を満たす良質の漁獲を追い寒風の中出かけて行く漁師たちの熱き想いに思いを致すと、つまらぬことでうじうじしていた自分が本当にちっぽけに思えてきたものだ。



今、私は大学を卒業して以来住み続けているこの街で、ステンドグラス作家として15年目を迎えた。絵描きとしては滅法目の出なかった自分だが、ステンドグラスの腕は買ってくれるお客さんも少なくないようで、どうにかやって

来られている。関東一円で機会を頂いている年に数回ほどの展示もますます順調だ。でも最近ふと感じることがある。緑や青、柔らかな白、様々なステンドグラス作品を作ってきたが、ふと壁にぶつかっているような感覚を覚えるのだ。何か大切なものを忘れてきているような…。そう、忘れてはいけない。私のステンドグラスづくりの原点はあの日失恋の涙に浮かんだ紅いランプシェード、夜半の街を流れるように駆けて行った寝台特急過雁の、あの窓の輝きにこそあるのだと。屋号の「グースの家」も、あの列車からヒントを得たもの。そうだ、また今度、重ねた歳の有難みを楽しむべく乗ってみようじゃないか、あの日見た紅い灯の、煌めく窓辺に憧れた北を目指す夜行列車に。そしてじたばたと若い恋にもがいていたあの日の私の泣きっ面を笑ってみるのも、また一興かもしれない。